

# みみタロウ

日本語版 69号 2008年4月

## 僕とコミュニティと日本と

ラファエル・ヘルナンデス



僕の両親は若いときにメキシコからアメリカにやって来て、出会い、そして僕が生まれた。だから僕という人間は、真ん中はメキシコ人。その周りにアメリカ人の部分がか

ついている感じ。JETプログラムを通じて5年前に来日し、最初は水口、今は長浜で子どもたちに英語を教えている。どちらの街でも、多くの南米の人々に出会ってとても嬉しかった。というのは、僕はアメリカ人で第一言語は英語。だけど母の言葉であるスペイン語やポルトガル語を耳にし、ラテンの人々の暖かさを感じることは、自分にとって心地良いもので、僕自身が日本での生活の中で必要としていたものだったから。言葉は心のシンボル。僕をはじめ、多様な文化的背景を持つ人が、言語を状況に応じて使い分けたり、「メチャ・busy」といった具合に言語を交えて言葉を作ったりするのは、その時の自分自身を表すのにピッタリくるからで、だからどれか一つだけではなく、どの言語も大切なんだ。

僕が日本の学校に赴任してきて一番にしたことは、南米の生徒の家族に挨拶して、仲良くなったこと。子ども達が僕のことを「先生、もっと日本に居てね」と言ってくれる度に嬉しくなる。そして、あるブラジル人の子どもの「洗礼を受けるから名付け親になって」と言われた時には、これまでの日本での体験に素晴らしい意味が与えられたようで感動した。僕はこのような人々との繋がりがあから、ここにいるのだと。ここでの暮らしを通し、僕のメキシコやアメリカ的な部分にブラジルやペルーや日本の部分が変わり、僕自身、豊かになったと思う。最初、ちょっと窮屈だったりタプタプだった日本製やブラジル製のジャケットも、いつのまにかフィットしてきた感じ。楽しいことや落ち込むことや色々あったけど、全ての経験がポジティブで、心から感謝している。

その中で感じるのは、古い価値観と新しい価値観の混じり合う日本の社会に、外国人を受け入れることの難しさ。日本人もどうやって外国人を迎えるのか困っているし、外国人も受け入れ体制が整うのを待たされている状態。

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」  
大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2F  
Tel/Fax: 077-523-5646  
E-mail: mimitaro@s-i-a.or.jp  
URL: http://www.s-i-a.or.jp

祖国で様々な職をもっていたラテンの人々も、日本人からは工場の労働者としてしか見てもられず、その先入観やプロセス重視の日本制度のため、彼らの発想や意見がなかなか認めてもらえないのは、彼らにも日本にとっても残念なことだと思ふ。

今、僕が一番の心配は、外国人の子ども達のことだ。アメリカでは、第二言語としての英語教育プログラムがあり、移民の子ども達はレベルや年齢に応じた英語教育を受けている。ここではまだその試みが始まったばかりで、日本語がわからないばかりに教科の勉強も遅れてしまい、祖国での教育課程からも取り残されている子ども達がいる。言葉は社会の扉を開く鍵。早く外国語としての日本語教育を充実させるべきです。外国人の子ども達は、二つの社会の現実を知っており、大人の視点も持ちあわせている。彼らの多くが最初は日本が嫌いでも、ここにいることを選択するのは、二つの社会を天秤にかけて安全な日本を選ぶから。子どもが日本社会にうまくなじむために、言葉以上に大切なのが、子ども自身とそして特に受け入れ側に開かれた心があることだ。そしてそのプロセスは、水に入るのをこわがる子がいる一方、飛び込む子がいるように人それぞれです。つらい経験をした子は、日本社会に心を閉ざし、コミュニティでしか生きようとしなくなる。教育というのは、人生の選択肢を広げること。僕がここに来られたのも、両親が一生懸命働いて、教育を受けさせてくれたから。だから親達は一番に子どもの教育を考えるべきで、日本社会には彼らを暖かく受け入れてあげてほしいと思っている。

僕は、ロサンゼルスが多文化社会の中で育った。人が混ざるところには豊かな文化が生まれ、色々な問題を補って余りある素晴らしい社会がある。日本はまだまだ外国人には閉ざされた社会だ。根がメキシコ人でアメリカ人の僕は、日本人からもラテン人からも心を開いてもらえ、二つの社会の架け橋としてやるべきことが沢山ある。でも本当は、日本人とラテンの人々が直接お互いを受け入れ合う社会になるべき。そのためにはまず、どの国籍の人でも気軽に集える場があればいいと思う。僕は長浜コミュニティセンターで英語を教え、体育館で柔術をしている。他にもいろいろな文化教室があるので、皆さんも是非、色々な所に顔を出してみ。きっと新しい何かが始まるから。